小川 勝の 直言タックル

新国立が受け継ぐ歴史

価値観共有した64年五輪

新国立競技場が受け継ぐべき歴史とは、どのようなものだろうか。ご存じのように旧国立競技場は、アジアで初めて開催されたオリンピックのメーンスタジアムだった。このことの重要性が、どれくらい理解されているだろうか。

ギリシャのアテネで始まった近代五輪は、第一回大会から六十四年間、ずっと西洋文化の中で開催されていた。それが初めて東洋で開催されたのである。五輪が、五大陸に及ぶ真の世界的イベントに飛躍するうえで、一九六四年の東京五輪は画期的な大会だったと言える。

開催時、日本は敗戦から十九年しかたっていなかった。

五輪の三年前にはベルリンの壁が築かれ、二年前にはキューバ危機。そして開幕の二カ月前には、いわゆるトンキン湾事件で米国が北ベトナムに「報復攻撃」するなど、東西の対立はきわめて深刻な状況だった。

それでも、東京五輪には米国もソ連もキューバも参加、そしてドイツは、東西統一チームとして参加している。政治からスポーツを切り離して、世界的イベントとして開催していくという五輪の意義は、多くの人々が切実な思いで共有していたはずだ。そのような大会が、敗戦から復興した日本で開催されたことは、五輪の歴史上でも、とても意味のある出来事だったと言えるだろう。

新国立競技場は、この歴史をしっかりと受け継いでいくことが大事ではないだろうか。当時の聖火台や、東京五輪の優勝者プレートを引き継ぐこと、さらには競技場の形や色彩に、どこかしら六四年当時を思い起こせるものがあったらと思う。

新しく計画される競技場に対して、陸上競技四百㍍の日本記録保持者、高野進氏が、東京新聞紙上で真情のこもった持論を語っていた。現役時代、競技場の好き嫌いはなかった高野氏にも、国立競技場だけは違った、という。「日本で一番大切な競技場だから、ここでは結果を残さなくてはいけない、一年で一番いい走りを見せるんだ」という思いで走っていたという。そして「シンプルでいい。私が旧国立に抱いたような感情。陸上競技選手が『いつかあそこで』と価値観を共有できる競技場を造ってほしい」とあった。

こうした「共有できる価値観」こそ、金で買うことのできない「公益」であり、それは歴史の継承なしには、成り立たないものだと思う。六四年東京五輪の継承に知恵を絞りたい。

（スポーツライター）